

## 第六期武蔵野市コミュニティ市民委員会

### 第7回委員会

#### 議事要旨

日 時：平成21年2月27日（金）18:30～

会 場：武蔵野市役所西棟 812 会議室

出席委員：高田委員、江上委員、橘委員、島森委員、渡邊委員、中村委員、井原委員、  
和久田委員、島田委員、井波委員、近藤委員、増田委員、清本委員、西村委員

#### 1. 議事

##### ①今後のスケジュール（案）について

・事務よりスケジュール（資料3）に沿って説明。

（事務局） 次回の第8回委員会は、アンケートのたたき台の内容と、八幡町コミュニティセンターの建て替えについて。

4月は3月の議論を踏まえ、市民アンケートの内容の確定と、境東部へコミュニティセンターを設置して欲しいという陳情について。

5月の連休明けからアンケートを実施するという目処。その間、委員会や協議会での課題や問題点への対応、あるべき姿についての議論を整理していき、対応方法を考えていく。

6月も同じ議論を続け、この時点までに出てくる市民アンケートの速報結果も踏まえて議論していただきたい。

7月も同じく中間報告の議論をしていただき、8月に中間報告を作成、皆様に公表してパブリックコメントをいただく。

夏以降は、進捗状況によっては変更があるが、年内を目処に最終報告をまとめていただきたい。

##### ②コミュニティ及びコミセンの課題と問題点の整理

（高田委員長） コミセン、コミュニティづくりでの問題を踏まえて、市民アンケートで市民に問かける内容や問題点を、皆さんに出していただきたい。

この委員会への諮問事項である「市民間の連携を支え、地域の活力を高めるコミュニティのあり方に関すること」「コミュニティ活動の活性化に関すること」「地域活動の拠点としてのコミセンの機能強化に関すること」をふまえて、皆さんのご意見を伺いたい。

(橘委員) 各コミセンのヒアリングから浮き彫りになった問題点は、現在のコミセン自体が非常に硬直化してきているということではないか。新しい人がなかなか入ってこない、高齢化、また一部の人たちにしか利用されていないといった問題を、今後新しいコミュニティで打破していかなければいけない。

そのためには、今までの延長線上のような平面的なコミュニティ、縦割りのなコミュニティだけでは解決しない。平面的なコミュニティに対して、私は立体的なコミュニティという表現を使いたい、コミュニティセンターだけがコミュニティではない。たとえば目的が特化された福祉の会、青少協、PTAなどもコミュニティと言えるので、それらを何とか1つにできないだろうか。

他の団体はコミュニティセンターのような建物がなく、建物を持ちたいという希望があるがなかなか実現されない。現在の縦割り行政ではその実現はむずかしいため、われわれ末端でそれを横割り、あるいは階層的なコミュニティとして組織的に持っていけないと、本当の意味で地域に根ざした、住民のためになるコミュニティになっていかないのではないか。そういう意味で、新しい提案として、コミセンがあって、その中に、たとえば福祉部、青少年部、シルバー部、子ども部、といった形のコミュニティが今後構築できないだろうか。

(高田委員長) コミセンの中に、たとえば福祉部やシルバー部、子ども部などを作り、どのようにするのか。

(橘委員) いわゆる合衆国のような形にしたらいのではないか。

(高田委員長) 今まで、役員になる人が困難だとか、新しい人が入ってこないという問題があったが、そういう時に、たとえば新しくできた福祉部やシルバー部を担う人たちが、コミセンの中に入ってくるということか。

(橘委員) コミセンそのものというわけ。そういう人たちもコミセンの一部として組織図に入れてしまえば、青少協などは比較的若い人たちの組織だから、そういうところから自然に上がってくることも考えられる。大きな組織になるが、コミュニティセンターがあって、その中に、各々が独立した主権を持って、現状の福祉の会、地域社協、老人クラブなどが丸々入るといったこと。

(高田委員長) ということは、コミセンの委員長が大統領ということか。

(橘委員) そういった感じである。ただ、自治権はある程度のものを持っているという形。大統領が何でもやるということではない。

(高田委員長) ずいぶん大きく拡大していこうという話だ。

(橘委員) そうなると、現状のコミセンの建物ではとても間に合わないため、今後ある程度コミセンの集約ということも、念頭に置いて考えて行かざるを得ないのではないか。

(島森委員) 各コミセンでやっていることが、本当に望まれているものをやっているのかどうかをアンケートで把握したい。

また、他団体とのことだが、ある程度コミセンと団体で話し合う委員会のようなものがないと、つながっていけないのではないか。同じように関わっている面があり、1つにしてしまったほうがいいところもあるかもしれないが、その辺は、委員会のようなものを開かないと分からない。

(渡邊委員) ヒアリングを通じて、それぞれのコミセンが今抱えている問題点や悩み、自慢できる点を聞きながら、これからどのようにやっていこうかと思った。

1つは、コミュニティセンターの問題として、高齢化した中でのバリアフリーの問題、あるいは全体として地球環境を見た場合のエコの問題、そういう視点が入り、誰でもがコミセンを利用しやすい、そういう入れ物が大事だということ。

建物について検討していかなければいけないが、人の問題の運営の仕方について、私たちもおおいに反省する必要がある。

運営委員がなかなか確保できないことだけを見るのではなく、運営について、きちんとした公開の原則がなされているか、民主的な機関運営がされているか、個人情報法を含めて人間の尊厳をお互いに尊重し合うような運営がされているか、ということも、運営委員が考えなければならない。

民主的な機関運営、個人情報の保護をきちんと守った運営があって、その上でニーズを踏まえて作った事業を執行した場合、いろいろな人が参加し、その参加の中から運営委員が出てくるような工夫について、われわれはもっと努力しなければならないのではないか。

もう1つは、各コミュニティのネットワークがうまく取れているところと取れていないところがあるのではないか。これからはコミュニティセンターそのものが、今までのコミュニティづくりの拠点から、コミュニティのネットワークづくりの拠点、行政と協働できる拠点にしていったらいいのではないか。

これから、新しくコミセンを作る場合の1つの視点として、事務所にブースを作る、パ

ソコンや印刷機をおき、お互い自主性を尊重しながら、そこを拠点にして、それぞれの活動を行い、その中でネットワークづくりをしながら、あらゆる行事についてお互いに連携できてやれるような入れ物を作るとよいのではないか。

(高田委員長) コミセンが拠点になるようにというのは、橘委員が言う、合衆国のようなものなのか。

(渡邊委員) 縦割りとの関係もいろいろあるが、そういう障害を少しでも取り除いて、それぞれが自主性を守って、それぞれの組織目的に従って活動し、お互いを尊重し合いながらネットワークづくりができるような拠点になったらどうか。

(高田委員長) 拠点というのは、たとえば青少協の人たちが、コミセンのパソコンを利用するということか。

(渡邊委員) 事務所機能をコミセンの中に盛り込んでいくということ。コミュニティ協議会はきちんとした入れ物と、事務所を持っているが、他の組織はなかなかそういった拠点が無い。パソコンというのは、事務機のツールの象徴として申し上げたが、そこに1つの拠点を置いて、印刷機は共同で使い、それぞれの自主性をきちんと尊重し合う。そして、何か行事をやる時にはお互いに連携を取って、宣伝などが極めて機能的にできるのではないか。

(高田委員長) コミセンのパソコンがあるとすると、それをタイムシェアリングするというか。

(渡邊委員) 目指すところはそうだが、具体的に機能的にやる場合には、いちいち構えてやるのではなく、連携を取りながらおこなうということ。問題は、お互いの自主性と組織目的をお互いに尊重し合いながらネットワークを作って、結果としてはみんなの幸せのためにやる、行政との協働ができる機能をそこに持たせていきたい。

人事の問題でも、1人で5つの顔を持ったりするのではなく、それぞれ組織目的に従って、みんなが1つずつの顔を持つようにすれば役員やコミュニティのリーダーがとても広がっていく。

(清本委員) 行政との協働というのは、行政のコミュニティセンターに対するあり方も変わらなければいけないということか。今の状況では、ほとんど住民側の自主的な動きであって、行政とはあまり関わりがない。どういう点で、行政と協働したいと思うのか。

(渡邊委員) 行政の1つ1つの課題と、1つ1つ協働していくという意味ではない。安心、安全のまちづくり、みんなが幸せになる町、といった場合、基礎的自治体のいろいろ

な目的と共通するところがたくさんある。よって、私たちは、私たちの立場からそういうニーズに応じて、みんなが幸せになる方法、安心、安全の町になる方法を打ち出しながらおこなう。それは行政と矛盾するはずがないが、矛盾した場合、議論をしていく、そういう意味での行政との協働ということ。こちらが主体的にそういうものをつくり出す拠点というアクセントを付けるべきではないかと思う。

(中村委員) コミセンの方々は、どこでもとても努力されている。しかし、いろいろイベントを企画実行するのはいいが、あまり行き過ぎると「役員へ」と、声がかかってしまうため、なるべく引っかからない程度には出る、という方が多い。コミセンの問題より、利用するほうの意識の問題があるのではないか。

(井原委員) 2回にわたるヒアリングの感想では、思っていた以上に、皆さん努力なさっていて、いろいろ解決していこうというところがあった。どうしても解決できないものは、箱の問題で、そういうお金がかかるところは、やはり行政から手を差しのべなければいけない。

この先の議論の仕方とも関わると思うが、コミュニティセンターとコミュニティ協議会、コミュニティをきちんと切り分ける必要がある。たとえば建物の改修の話というのは、あくまでもコミュニティセンター、箱の問題。誰が使うのか、という話があるので、広がっていつてしまっているのではないか。まず市民に「皆さんはどんなコミュニティが必要ですか」と、このコミュニティというのは、生活していく上でどんな受け皿が必要かと、聞きたい。

それから、コミュニティ協議会の皆さんが悩んでいることが、果たして市民が求めているコミュニティとマッチしているのか。まず市民が何を求めているのかというところを探らなければいけない。

また、コミュニティ協議会、青少協、福祉の会などをもう少し再編できないだろうか。特にPTAでやっていると、青少協にも、コミュニティ協議会、地域社協と関わりがあるが、全部がバラバラで、組織としてきちんと連携できているようにあまり感じない。これをもう少しうまくできないか。

しかし、それも市民がどのような受け皿を求めているのかということ、きちんと把握しなければいけない。

(和久田委員) 私はコミセンに 20 年ぐらいかかわっているが、10 年ぐらい前からコミセンが、事業をやったり、広報誌を発行するようになって、最初の頃と比べると、変わってきた。しかし最近のコミセンは、事業をやることに力が入っていて、「コミセンとはコミュニティの拠点です」と言っておきながら、コミュニティとは違うのではないか。

今、中央福祉の会で災害時の要援護者の対策事業があるが、12 月に手を挙げたことで、さらにそれを強化させなければいけないと考えている。

これからは、もっと大きなコミュニティに発展させるということではないかと思う。いろいろな団体と手をつないだりして、やっていくことになると思う。

(高田委員長) 12 月に手を挙げたということは何なのか。

(和久田委員) 災害時の要援護者対策事業のこと。民生委員が要援護者に該当する人を今ピックアップしている。市からは上がってきているが、さらにそれぞれ訪問してなどが終わってから福祉のほうで一緒に支援者を募る。

(高田委員長) そういった活動は、コミセンがやったほうが良いということか。

(和久田委員) そうではなく、いろいろな人の協力がないと支援事業ができないため、ネットワークが必要ということ。コミセンも入っていただいているが、何かみんなバラバラである。橋委員もご指摘のように、やはりこれからはそういういろいろな団体が手をつないで、もっと大きなコミュニティにしていったほうが良いのだろう。

(高田委員長) 大きなコミュニティというのは、どんなイメージか。

(和久田委員) まだ具体的には分からないが、バラバラなものをまとめてもっと大きくなっていくという感じ。

(高田委員長) ネットワークというのは、1つが大きくなるのではなく、いろいろなつながりができるが、そういう形の大きさか。1つのある団体が大きくなるのではないと。

(和久田委員) そのとおり。

(高田委員長) ネットワークの広がりというのが、大きなコミュニティという意味か。

(和久田委員) それとは違う。コミセンは拠点を持っているから、たとえば災害などのいろいろな大きな問題をみんなで考えて、安全、安心などに向けていったらいい。そういう広がりをもっと持ったほうが良いのではないか。

(高田委員長) コミセンでの力点を、もう少し考え直したほうが良いのではないかということか。たとえばイベントではなくもう少し全体的な、安全、安心のまちづくりなど必

要なことを考える、重点の置き方をコミュニティ協議会で考えたほうがいいのかということか。

(和久田委員) そればかりではないかもしれないが、事業をやっても、なかなか広がりが無い気がする。人を増やすために、事業をやって、お互いに知り合いになっていくと考えてやってきたが、本当につながっているのだろうか。いざ何かあった時に地域の人たちが手をつないで何かができるようにはなっていない。

(島田委員) 今までのコミュニティセンターは、箱ものの維持管理を中心にコミュニティ協議会がやってきた。しかし、それをもう少し広げていかなければいけないのではないかという声が、多々挙がってきているのではないかと。細部は詰めていかなければいけないが、橋委員の話に賛成。コミュニティ協議会というものは地域をまとめるもの、そしてコミュニティセンターがその活動拠点にならないと、活動が進まないのではないかと。それを市民に対するアンケートで確認していければいいのではないかと。

和久田委員の話を補足すると、要介護1から5の人、また障害者を対象にした災害時要援護支援事業というものがある。災害（主に震度6弱の地震）が起きた時に、武蔵野地区は災害本部を作るが、その時に介護を受ける人、障害者、また外国人を含めて、援助の手を差しのべるべきだ。要援護者は、今民生委員が調査している。要援護をどんな形で支援していくか、市民社協の下部にある地域社協が中心になって、地域のまとめ方を考えている。来月いっぱいには皆さんの動向を確認する。

民生委員が調べて、あとは地域社協に落とす。地域社協では、支援する人をどういうふうにも集めるか、ということで、活動が始まる。

(高田委員長) 分かった。そういう具体的なネットワークの動きがあると。

(島田委員) 委員長が言われたように、そういう時にコミセンの協力を得なければ、それも成り立たない。箱ものが優先ではなく、ネットワークに必要な箱ものを、という形もあるのではないかと。

(井波委員) 前回以降、何箇所かコミセンを回ったが、「ぶらりと寄って欲しい」「誰でもが利用できる」、という雰囲気はなく、「誰が来たのか」と怪訝な顔をされる。

また、大型コミセンは館の運営管理だけで大変なため、きめの細かいコミュニティづくりの活動を自主三原則でできるのは、中型館ぐらいではないかと思う。

また、実際に回ったり、前回のヒアリングでは、理想と現実のギャップが大きいと感じ

る。大きなコミュニティというのは、望ましいことだと思うが、いざ足下を見た場合、いろいろなコミュニティが、いろいろな場であっていいのではないか。これ以上、コミュニティ協議会の方たちにやっていただくことが可能だろうか。

もともとコミュニティというのは、上から押しつけるものではなく、必要にせまられて自然に生まれるものだと思うので、恣意的に持っていく必要はないのではないか。

(近藤委員) ヒアリングで協議会の話聞いたが、まず、対象とする人たちをもう少し広げるために、会報の他に、たとえばホームページやパソコンなどをもっと活用することがあるのではないか。また、活動内容でイベントに力点が置かれ過ぎているのではないかという話があったが、同感である。

私の所属している小学校の立場から言うと、人材を派遣して欲しい。学校が地域の方の力を得たい時、コミセンが協力してくれることで、人材派遣も活動内容を広げるということになるのではないか。また、たとえば、時には小学生の意見も取り入れるような運営の仕方をして見たらどうか。

最後に、市民アンケートの質問項目で、「あなたは地域に何ができますか」ということを聞いてみたらどうか。2、3年前に「雪掻きができますか」というアンケートが来て、「できる」と出しとき、自分が唯一地域に貢献できることだと感じ嬉しかった。どんなことを地域にしてもらおうかということではなく、主体としてどんなことができるか、という質問もいいのではないか。

(高田委員長) 小学校への人材派遣を希望とのことだが、どんな人材を求めているのか。

(近藤委員) もう実際にやっていただいていることだが、たとえば昔の話をしてくれる方、昔遊びを教えてください方、堆肥づくりを一緒にしてください方、学級園で野菜を一緒に作ってください方、などである。

(高田委員長) コミセンの方々は、そういった情報を発信しているのか。

(西村委員) 南町では「南町人材ネットワーク」というものが10年以上前からある。これは、地域で人材ネットワークの会というものがあり、コミセンを拠点としてやっている形。そろそろコミセン主催にしようか、という話もしている。

地域にはいろいろな人がいる。学校へ行って授業で話すこともある。これは、ちょっとしたことでできることだと思う。

(和久田委員) あり方懇談会で人材ネットワークがあり、「そちらのコミセンには何かで

きる方がいらっしゃいますか」といったものがあったような気がするが。

(島田委員) その時に、今言われたような、小学生を対象にどういうことができるか、という観点が入っていたかどうか。

(和久田委員) それはなかったかもしれない。

(橘委員) あれは、16 コミセンがお互い何かをやろうとした時に、自分のところでは調達できない人材で、他のコミセンに適任者がいればお願いするというためのものだった。多分あの表の中には、近藤さんが必要な人材はいないと思う。

(西村委員) 子どものいる町にいる、ということに意味があると。

(近藤委員) 自分の学区域にということ。

(渡邊委員) 「あそべえ」という、一定の場所を決めて、子どもたちの放課後の居場所となる制度がある。ボランティアになる人を事前に登録し、コミセンから役員が行っていて、そういうものに貢献していた。学校がそういう人材を求める時に、来てもらう人がどういう人なのか、かなり気を使うから、そういう時にコミセンから、地域に詳しい人について、この人だったら大丈夫だと。

(近藤委員) 今は、地域の方として「地域の教育力」という言い方をしているが、子どもと一緒に活動してくれる人が地域にいてくれる。一緒に活動したからこそ、地域で会った時に挨拶がし合える関係ができてくる、というのがコミュニティのもとになってくるのではないか。

(増田委員) この前のヒアリングの時に「運営委員のなり手がいない」というところがほとんどだった。2箇所のコミセンに行ったところ、地域住民の多数が参加できる数少ない催し物をやっているようなところはよかったが、年間の活動の中で、行事が儀式のように決まりきったものになっているのではないかと思った。役員と運営委員の意識の隔たりも感じた。

本当にやりたい活動なのか、毎年意義を確認し合えているのか、とても疑問に思った。行事に参加しようとするすると運営委員になってしまうため、ほかのやりたくないこともやらなければならない、義務が多くてやりたいことの方が少ないのが、委員のなり手が集まらない原因のひとつだと思う。役員にならない程度に、あまり入り込まない程度に参加するという発想にもなってくる。

多くのNPOなどでは、最も大きな悩みのひとつに活動場所がないということがあるが、

コミセンは、せっかく場所があるのに、活動に参加する人がいないのはとてももったいないことであって、贅沢な悩みではないか。もっとみんなが参加しやすく、活動するためにコミセンを使いやすい雰囲気があれば、だんだんみんな集まって来られるのではないか。

コミュニティは自然発生的なものだと言われたが、老荘大学というところや市内の手話教室で知り合った人たちで気が合って、自然発生的に小さいコミュニティができています。そういう人たちが、コミセンを拠点にしてくれて、自分たちがやりたい活動もやりつつ、コミセンに協力する気になれるといい。コミセンでいろいろな催しをやらうといっても、結局今までコミセンに関わっていた人たちの負担が増えるだけで、減ることはない。そうすると、やりたい人が増えない。みんなが自分のやりたい活動もやりつつ、協力できる場所は、し合える場所になれることが大事ではないか。

(高田委員長) 地域の人が協力するということと。増田さんの問いかけは、どんなものがいいか。

(増田委員) 「こんな行事なら参加したい」「こんなことをやりたい」「こういうことがあったらやりますか」といったことか。

(高田委員長) 参加したいというところで、いくつかの例を挙げるということか。

(増田委員) 例がないと、書く人はいないかもしれない。あらゆる例を書いて。

(清本委員) 1つはヒアリングで皆さんに集まってもらって、とてもよかった。なぜならコミュニティ協議会の平の役員の方が4、5人出てきて、他のコミセンの活動内容を知ることによって、自分たちを見直せたのではないか。そういう声や、あのように話し合う場がもっと欲しいという声を聞いたので、参加者にとっても大変よかった。

感じたのは、本当にやりたい活動なのかということ。いくつかのコミセンで、自分がやりたいことをやるために仲間を3人連れてきて、実行委員会を作って、そこでやりたい活動をやるという方式は、非常に印象に残った。

また、中高生をどのように取り込むか、という問題で、行事に高校生を参加するように呼びかけるということではなく、もうコミセンの中に取り込んでいるところがあるのは、とてもいい。

それから、大きなコミセン、ネットワークを作ることについてももちろん大事だが、やはりコミセンというのは、その地域の課題を見つけて、その課題を解決するために何かをやるということが基本だ。その課題が解決された時に、達成感があってうれしいの

だと思う。コミセンの委員のなり手がいないというのは達成感がないからではないか。

運営委員会を見学したところ、活発に議論がおこなわれているところは、意見が出しやすい。中心になる委員長が意見をシャットアウトするのではなく、ちゃんと受け入れる、若者の意見もきちんと受け入れるという態度だと、意見を出しやすいのではないか。

どちらかというと、大きなコミセンや、始めからネットワークを作るというより、地域特有の問題もあるから、地域の問題は地域で解決することのほうが大事なのではないか。

質問については、自分が何をしたいか、コミセンで何をやりたいか、地域に課題がある場合にどうするか。「何か問題があった時、あなたならどういうふうに解決しますか」と聞きたい。

(西村委員) 先日、八幡町のタウンミーティングに行って、今ある16のコミセンをいくつかに整理するというコミセン関係者がいたのに驚いた。自分がいる南町のコミセン以外のことをも考えたこともないし、考えようとも思っていなかったので、そういう発想もあるのだなど。3年前からコミ研連でネットワーク事業があるので、イベントや活動で必要な時には、隣などのコミセンと組むことも現実にはできるようになっているのはおもしろい発展だった。

コミセン主催の事業だけに限らず、地域のさまざまなグループをそういった形でコミセンが一種の扇の要になってつなげるという発想はある。

大型館で大きなイベントも多いので、役員が大変だというような話も出る。イベントでも何でも、やりたい人がやる。そうなれば、きっとまず入口のところから、やりたい人が何かをやって、やりがいがあって、ということであれば運営委員にもなってくれるだろう。

南町は福祉の会とコミセンがうまくいっている町の1つだと思っている。南町福祉の会は、丁目ごとの活動は福祉の会がやる、またいくつかの行事や活動は南町福祉の会と南町コミセンが共催でやるといったことが、自然発生的にうまくいっている。

たとえば青少協は、青少協の目的があって活動している中で、むしろ硬直化している。若い人たちを取り込みたいということがあり、実行委員会にも入っていただいて一緒にやっているが、町全体として市民の力のようなものが強くなるには、諸団体とのどういう連携の組み方がいいのかということも、手探りしている状態。

(高田委員長) 青少協は苦勞しているが、コミセンのほうは自然発生的にうまくいっているということか。

(西村委員) 今回の場合はそうである。各団体をどのようにつなげるか、ということはあるが、機械的につなげるということは、発想として南町の場合には考えられない。そういう形で、先ほど言った地域の市民の力がより活性化する、より強まるとは思えない。

(西村委員) たとえば行政との協働も、縦割りの矯正は期待している。市役所にお尋ねした時に、「コミセンとは何？」と聞かれることが複数回あった。

(高田委員長) そういう職員は存在するのか。

(事務局) たしかに、最近入った若い職についてはコミセンが何かという研修はやっていない。人事のほうに話をしておきたい。

(江上副委員長) アンケートにつながる話としては、どうやるかは難しいと思うが、地域の現状あるいは武蔵野市民の現状、何を考えているかなども大事なのではないかな。

コミュニティ協議会の問題を考える時、組織論、制度論から入ると失敗すると思う。まず、組織ではなく、やはり活動を優先させて考えれば良いと思う。活動の仕組みは、必ずしも組織である必要はないかもしれないし、組織のほうがいい場合もある。ネットワーク的な緩やかなつながりのほうがいい場合もある。それは、やる事柄に応じて多様である。

今のコミュニティ協議会にはそういう多様性がなく、少なくとも多様性を受け入れる土壌がないのではないかな。簡単に言えば、ある種の型があってその型にはまる人は受け入れるし、入りやすいが、その型にはまらない、こういうのはいやだと思うと、入らないし、入って欲しいとも思っていない。受け入れないというのは、協議会が受け入れないだけでなく、入ろうと思った人がこの型は私に合わないからやめることも含めて両方。

形の決まった組織である必要があるのか。つまり、行政を縦割りだと批判するけれど、実はコミュニティ協議会だけではなく住民組織というもの、かなり縦割りなのではないかな。そういうあり方そのものをいくら強化しても、これは根本的な問題の解決にはならないだろう。

やはりやりたい思いをどうつなげていくかということ。それは組織を作ることではない。

また、武蔵野のよいところは、個人を基本的な単位にして、個人の参加という形でやってきたこと。自主三原則は、まさに個人を活かすための原理原則である。話を伺っていて、個人が大切なのだという話があまり出てこなかったな、と思っていた。この特性は活かしていく方向で考えたほうが良いと思う。

もう1つ、組織より活動だという話につながるが、コミュニティ協議会がいろいろなこ

とを抱え込みすぎなのではないか。運営委員のなり手がいないのは、少し発想を変えて、どう組織を変えるか、という話ではなく、もう少し違う発想で組み直すことを考えたほうがいいのではないか。

(高田委員長) 1つは、目的別コミュニティが話題になっている。一番の問題はコミュニティづくり。コミュニティの運営はコミュニティ協議会でやっているが、それ以外に個々のグループというものが、どのようにコミュニティづくりを担っていくのかというところで、きれいに組み合っていない。

先ほど橘委員は合衆国型ということ定義をなさっているが、どのようにすればそう行くのか。コミセンというものと、またNPOが、同じようにいろいろなところでコミュニティづくりをしていこうとしているが、うまくかみ合っていないことがある。コミュニティづくりは両方が一緒になってやるべきこと。

(高田委員長) 江上副委員長が言っていた、協働ということを使う時に、なぜ職員の人と一緒にいないのか。一緒になって責任を取ってもらおうというところも、どうだろうということがある。三鷹のほうでは職員も参加しているわけだから、われわれと対等、平等というところがある。そういうところを新しいコミュニティづくりに反映していきたい。

これまでの話で何か聞きたいことがあれば発言をお願いしたい。その後、市民アンケートについて質問項目を1つずつ挙げていただきたい。

(西村委員) もう1回ぐらい、コミセンに関心を持っている人たちと、あまり枠にはめられないで話せる機会があるといい。たとえば、少し今の線からはみ出すような話をしてくださる方の話を聞くことで、何かヒントがあるのではないか。資料にまとめられているのは、あたりまえのことなので、もう少し未来に向けてのヒントが欲しい。どういう形でどう呼びかけるか、具体的には分からないが、そういった話がもう一度あるといい。

(高田委員長) 各コミセンからユニークな人を1人、出して欲しいということか。

(清本委員) そういう枠組みではない。長期計画、調整計画の策定の時に、たくさん「居場所」という言葉が出てきた。いろいろな意味でみんなが居場所を欲しがっているのに、コミセンがその居場所になっていない。たとえば、けやきのある人は、たまたまご自分の家が一人住まいになったから居場所にしていいとあって、すでに運営が始まるまで

来ている。やはりコミセンの体系だけでいいのか、という問題をもう一度問い直すという意味で、いろいろな考えのある人にも出てきてもらって、話をするというのはおもしろい。

(高田委員長) コミュニティについてということであると。では7月にやろうということになれば、やってもかまわない。他には。

(井原委員) 大きいコミュニティと小さいコミュニティということだが、あくまでも再編ができないだろうか。どちらかという、居場所という部分が気になる。助けて欲しいと思う人たちを、コミュニティ協議会の皆さんが助けるのではなく、助けられる何かを作れないだろうか。各団体から支援がバラバラに差しのべられているのを、再編できないのか。

(高田委員長) P T Aのことか。

(井原委員) P T Aは青少協と関わるが、青少協は公立の小中学校しか入らないので、私立の子ども、親はどうなるのかということもある。

コミュニティというのは、基本的に行政に行き着く前の段階で、市民同士でできないのか、それがコミュニティだと思っていた。コミュニティは、行政と助けが必要な人の間にいてくれる立場なので、その方たちで何かできないかと思った。それで再編という言葉を使った。

また、まず地域や市民が何を求めているのか、ということを知りたい。「あなたは何ができますか」というのは、センセーショナルで、自分にできることが何か一緒に結びつけることができたらいいのではないか。

(島田委員) 大きい、小さいと言っているが、大きいというのは、地域的に大きいという意味ではないのではないか。地域は地域でまず必要だと思う。地域の組織の連携が取れるようなものを作っていくのが、コミュニティ協議会というものだと、私はとらえた。

また、江上副委員長が言われたことを排除するものではないと思うが、ただある程度組織ということもあるのではないか。もっとアメーバ的にいろいろ変わっていくものができるような仕組み、組織、そういうものができるといい。非常に難しいが、それをできるよう何か努力して行く価値はあるのではないか。

(渡邊委員) 地域の課題は、その地域で解決していく、その達成感がコミュニティづくりにつながり、いろいろな悩みの解決になるという話には、まったく同感。

またもう1つ、コミュニティセンターという場所を通じて、やりたいことが自由にやれ

るようにバックアップしながら、それが自由にやれたことによって、達成感、やりがいにつながり、コミュニティ活動の活性化につながるという話も、本当にその通り。

忙しすぎるとか、行事をやり過ぎるという反省もあるが、その中の1つに、補助金で賄われているということがある。語弊があるが予算消化的な事業をやってしまうという実体もある。しかも行政の予算との関連から、それを早い時期にやる必要があり、今やっている事業の反省が十分にされないうちに次のことをやるため、硬直する原因となり、直すべき点でもある。

また、組織論については、みんなで話し合うようなものを作るためには、ある程度組織的なものも必要だと思うが、組織論で物事が解決しないし、江上副委員長のご指摘の通りだと肝に銘じたい。

(江上副委員長) とても素朴な疑問だが、市民各層みんなが来るべきだと考えられている施設というのは、コミセンぐらいではないのか。参加者を増やして、あらゆる層の人たちに来て欲しいのは何故か。公園なら、もしお年寄りにしか使われていなくても、お年寄りの憩いの場になっているだけでOKなのに、どうしてコミセンだけはそうではないのか。

(増田委員) 税金で運営されていて、みんなが来て活性化すべきだと思われるからではないか。

(高田委員長) 「みんなが来い」ということが、コミュニティづくりの時に多様性というようなことで前提になっている。

(島森委員) 江上副委員長の言葉に関連するが。コミュニティセンターは年代別にいろいろな人が関わるのが大事だとみんなが思っているのなら、そういう努力を今のところはしていない。市民の人たちが自分たちで楽しめる何かをやって、自分たちが作って、それが達成感につながる場であってはなぜいけないのかと。

ただそういう間口を広げる必要はあるのかもしれない。やりたいことがあったら、集まって何かができるという受け皿も、本当に必要とされているのかどうか、市民の人たちの意見を聞きたい。

(井波委員) コミセンの中に、箱プラスコミュニティ協議会が入っているのが実体だが、外から見ると、その活動込みでコミセンととらえる。実際どういうものを求めているのかを抽出するようなアンケートを出したい。

もう1つは、人間というのは、多分居心地のよいところに流れるものだと思う。居心地のよいところを提供しようという努力はもちろん必要だが、どこまでやるかという線切り

があるのではないか。

(江上副委員長) その通りだが、居心地のよさは具体的に何か、人によって違うから、多分各協議会が悩むのだと思う。お年寄りの居心地がいいのと、子どもたちが行きたいところは、多分違う。しかし、コミセンは万民を受け入れようとするため、みんなに居心地のいいところを作ろうとして、どうしていいか分からなくなるのではないか。

(井波委員) この委員会の前提はコミセンありきで話が進んでいるが、今コミュニティに属していることを前提として、「そのコミュニティの活動は、今武蔵野市にある16箇所のコミセンを必要としていますか」ということをアンケートで聞いて欲しい。「イエス」の場合はさらに、何を求めるのか、「ノー」の場合、それはなぜかを知りたい。「ノー」の人たちにとっては、他にも居場所があるということだ。市民の100%が利用すべきではないはずだから、本当に必要な人たちのために、どのような運営が必要なのかということを探っていくべきではないか。

(西村委員) 「あなたが属するコミュニティは」ということは、自分がコミュニティに属しているかどうかというところで、回答に困る人がいるのではないか。

(井波委員) 最初に、問いとしてそれから入るかもしれない。

(高田委員長) 「あなたの居場所は、この地域にありますか」ということか。

(井波委員) それも1つだが、それだけでは、直接コミセンと結びつかない。やはりコミセンという言葉が入らないと、具体的にならない。

(高田委員長) 江上副委員長が言ったように、コミセンにある種の型がある。そういう人しか受け入れられないというものもあるのではないか。コミセンに受け入れられやすい型の人と、そうでない人がいるというのは、その通り。

(井原委員) 居心地がいいところに行くのではなく、居心地が悪くところに行かなくなるのではないか。居心地が悪くて行かなくなったのが積もり積もったから、協議会の人たちが何とか修正しようとして、今度は逆に手を広げてどれもこれもなっているのが、現状なのではないか。

コミュニティ協議会をコミセンの運営から外したら、コミセンはどうなるのか。

(高田委員長) 今の協議会の人たちを外すということか。

(井原委員) 外すという言葉は失礼だが、いちいち名前を書かなければ使えないのではなく、コミュニティセンターが普通にたまり場になっていくということ。近所で誰彼が集まって、適当に場所を分け合って、譲り合って使うことはできないのか。

(高田委員長) それは、各コミセンにコミュニティルームがある。

(井原委員) そうではなく、協議会の方たちが居心地のいい場所を提供するべきだと考えなければいけないのかと。それは申し訳ない。

(井波委員) そういうことを考える必要はないと、私は思うが、できたらそういうところにしたいと、皆さん思っている。ただ、人間はおそらく自分ももっと居心地がいいところがあれば、そこ行くから、コミセンだけがコミュニティの拠り所ではないのではないのか。

(橘委員) 質問として、これからのリフレッシュしたものではなく、「現在のコミセンは利用したいと思いますか」ということ。おそらく「イエス」「ノー」が出てくる。

(橘委員) 最初から食わず嫌いの人ではなく、利用したけれど、居心地が悪かった人。

(高田委員長) 要するに、どこが合わなかったのかということか。

(橘委員) 居心地のいい人はそのまま来ているということ。よく利用されている方は、改装休館すると、不便で困ったと聞いたが、普段利用していない人は、痛くもかゆくもない。そういう点で、最初から来ない人、食わず嫌いの人は、どうしようもない。

(島森委員) 関連して、使いたくない、使わない人の理由を聞いてみたい。

(高田委員長) それは質問の系で、利用したけれど私には合わないという人がいて、「どこが合わなかったのですか」というところを聞くことになる。

(島森委員) 利用しなくても、コミセンを使ってみたいと思わないという、食わず嫌いの理由もあるのではないか。

(高田委員長) 今の質問は、橘委員の質問に派生して出てくるのではないかと思う。

(渡邊委員) 今まで利用しないで知らない人もいるので、「あなたはなぜコミセンを利用しないのですか」という問いのほうが、一度も来たことがない人も含めて問いかけるし、一般的な質問としていいのではないか。

(高田委員長) その辺は、質問のところで調整する。

(井原委員) 2つある。「あなたはどんな居場所が欲しいですか」ということと「普段、どんなつながりがあったらいいと思いますか」ということ。普段生活していく上で、こんなネットワークがあったらよかった、そういうことがあったらそれを聞いてみたい。

(島田委員) 聞きたいことは、「コミュニティに何を期待しますか」ということ。コミセンではなく、コミュニティ。

(清本委員) コミュニティで分かるのか。一般にはコミセンとコミュニティというのは。

(橘委員) コミセンと理解するだろう。

(和久田委員) 中央コミセンが昨年 30 周年で、現在と未来を分けて記念誌を作った時に、質問した「未来のコミセンはどんなコミセンにしたいですか」ということを聞きたい。

(井波委員) コミセンについてだが、たとえば「なぜあなたは利用しないのですか」というのは、果たして当たっているのか。自分が属しているコミュニティがあって、そのコミュニティとしてコミセンを使うかどうかなら分かる。

個人でコミュニティセンターを使うといたら、私も新聞を読みに行くぐらいはやる。たとえば個人でもピアノをやる方は、ピアノ室が必要だからコミセンに来るが、個人で使う場所が今の 16 箇所にあるだろうか。

(橘委員) よく 1 人で来られて、「部屋が空いているのだから使わせてほしい」ということがあるが、基本的には断っている。1 人ではコミュニティではない。2 人、3 人以上が集まって、そこで人間関係ができてくるのがコミュニティだと考えている。よって、1 人でふらりと来て、居場所があるとか、ないとかというのはどうか。

(井波委員) たとえば、いらっしゃる方同士で、というのはどうか。

(橘委員) それはあまり見ない。やはり個人単体を対象にするということは、今の武蔵野のこういう体系の中では、考えていたら結論は出ないのではないかな。

(高田委員長) 何らかの活動をする時に、コミセンが利用しやすいかどうかということは、個人として考えるのか、自分のグループとして考えるのかは、順番に聞いていけば出てくるのではないかな。

(橘委員) たとえば学習室があるが、これは、はっきり言ってコミュニティではない。あくまでも個人は、コミュニティの対象にはなり得ないと思う。

(西村委員) サロンが非常に明るくなってからは、新聞を読みに来たり、自分で本を持ってきたり、待ち合わせをしたりということがある。

(橘委員) 偶然に来る場所、ロビー的なものがないコミセンは、個人でも 2、3 人のグループでも、居場所はない。そういう点は改善していかなければいけないが、ぶらっと来てお茶でも飲んで、雑誌でも見て、という雰囲気のあるところは、そんなくない。

(井波委員) それはコミュニティセンターの役割なのだろうか。コミュニティと名が付くからには、最低でも 2 人 3 人のグループで部屋を借りて何かをやるという目的でないと、コミュニティセンターという名前にふさわしくない。

(高田委員長) そういうところは、問いを作ればいい。

(和久田委員) 個人でも来られるコミセンが、コミセンだと思う。

(井波委員) そうあって欲しいが、現実はなかなかそうになっていないのか。

(島森委員) 聞きたいことは、「どんなことがあれば、コミセンに来ますか」ということ。

(西村委員) 「コミセンを利用したことがありますか」と聞きたい。

(高田委員長) 最初の質問だ。これで「イエス」「ノー」に分けて、それぞれ理由を聞くということになる可能性がある。

(清本委員) 「あなたの住んでいる地域に、今何か解決したい課題がありますか」と聞きたい。

(増田委員) 「コミセンは市民なら誰でも無料で利用できる場所です。ぜひ利用していただきたいと思っています。コミセンがどういう場所であれば、利用しますか」と聞きたい。

(高田委員長) 今回は問題点の整理をして、それについての課題を質問の形で出した。次はアンケートの内容を、たたき台をもとに検討する。

○第9回の日程について

・4月日程…4月10日(金) 18:30～

[了]

## 第六期武蔵野市コミュニティ市民委員会

### 第8回委員会

#### 議事要旨

日 時：平成21年3月23日（月）18:30～

場 所：武蔵野市役所西棟812会議室

出席委員：高田委員、小木委員、橘委員、島森委員、渡邊委員、井原委員、井波委員、  
近藤委員、増田委員、清本委員、西村委員

#### 議事

- ・市民アンケートの内容検討
- ・コンサルタントより、アンケート案について説明

（高田委員長） 各委員の知りたいことがこのアンケートの中に反映されているか、また、「これを入れたほうがいい」といったことがあればご指摘願いたい。

（井波委員） 4ページでは地域活動と書かれているが、「コミュニティ活動」と言ったほうがふさわしいのではないか。

（高田委員長） 一般の人が回答するので、「コミュニティ活動」というよりも「地域活動」と言ったほうが伝わりやすいのではないか。

イメージとしては、地域というのは単なる範囲的なものだが、コミュニティというと、そこにハードやソフト、いろいろ中に埋め込んだような意味があるので。

（井波委員） 今回の委員会で、市から提言を求められている項目からすると、やはり括弧書きでいいのでコミュニティという言葉を入れるべきではないか。

（井原委員） 問5のところとも絡むが「どのようなつながりがあったらいいと思いますか」というところで、つながりとコミュニティを並べて書いたほうがいい。

（高田委員長） つながりとコミュニティは違う。

（井原委員） ならば、2つ併記してもらいたい。アンケートを受けた方がどうとらえるのか、ということも聞きたい。地域というと、住んでいるところに限定されてしまうと思った。たとえば、父母会とすると地域とは外れてしまう。

（清本委員） 並列的に、PTA、青少協、父母会と書いたらどうか。

(高田委員長) まずは大きな話、それから小さな話に進みたい。地域活動の話で言うと、コミュニティということに関して、何らかの質問を立てたほうがよいだろうか。

他に、例えば前回近藤委員からは「あなたは地域に何ができるか」という設問が提案されたが、意図がうまく反映されているか。

(近藤委員) 「何ができますか」という時に私が考えていたのは、もっと積極的に、自分がどう関わるかということ。

(高田委員長) 問8の前に、まず地域に関わる気があるかどうかを聞いて、その気があるのなら対象はどれか、という聞き方にしてはどうか。

(小木委員) その前に、「どのようなつながりがあったらいいと思いますか」という問5がある。問6では、地域として取り組まなければならない課題を尋ねているわけだから、「では、あなたはそういう課題解決のために、つながりを地域と持つために、何かしたいと考えますか」と聞いて、「それでは次に挙げるもののうち、参加したり、貢献することができると思うものはどれですか」という流れではないか。

(清本委員) ここで「参加したり」という言葉が出ている。参加するというのは、何かすでにグループがあって、そこに参加するというイメージだが、貢献するというのは、自分が主体的に働くイメージ。「参加したり」という言葉で、少しイメージがぼやけたのではないか。

(渡邊委員) 問9のあとか、問10の4のあとに、コミュニティということの意識、イメージのようなものを聞いたらどうか。もう1つ、ボランティアのイメージも、聞いたらどうか。

(高田委員長) では、コミュニティのイメージとボランティアのイメージをつけ加える。

(橘委員) コミュニティセンターについて、コミセンの人たちの中では、「まちづくりの拠点」と言っているが、みんながそう思っているのかどうか、聞いてみたい。

(西村委員) 5ページで「住民が自主的に活動する活動の拠点としてのコミュニティセンター」という言い方をしているので、整理が必要。

(高田委員長) これは「コミュニティセンターを各地に建設してきましたが」と言った方がいい。そして、コミュニティセンターの役割を聞いてみる。コミセンの役割の中に、まちづくりの拠点として、ということを入れればいいのではないか。

(島森委員) 問11で、「知らない」に○を付けた人について、設問を設けることによっ

て、今後知ってもらうためにどうしたらいいかが分かるのではないか。1つの例として、転入してきた方に「コミュニティセンターを知っているか」と聞くと、「知らない」とのこと。あるということは聞いたけれど、それがいったい何なのか、しかもどこにあるか分からない。行ってみようかと思ったけれど、どこに地図があるのかも分からない。住所を聞いても転入してきたばかりなので、そこへ行くまでに躊躇してしまうと言う。

(高田委員長) 知らない理由として、転入してきたばかりであることの他に何かあるか。

(橘委員) 転入者だけの話になっているが、実は私も何十年も住んでいて、定年になって初めてコミセンを知った。そういった人は、かなり多い。

(井原委員) 知らないと答えた人が「なぜ知らないのか」と聞かれても、答えようがない。それよりは、在住年数が聞かれているし、知った理由も聞かれているのだから、そこから知るためのツールとして、何が効果的だったのかは、一定程度分かるのではないか。

(コンサルタント) アンケートとして、知らない人になぜ知らないのかと聞く選択肢は無理だと思う。そうすると、知らないと答えた人の属性から、理由を推測するしかないのではないか。属性の部分をもう少し厚めに聞けば、クロス分析ができる。

(高田委員長) 年齢と住んでいる場所と、職業はこの中に入れるか。

(橘委員) 子どものいる女性であれば、たいがいPTAなどの関係でコミセンは知っていると思う。知らないのは男性。

(高田委員長) この中に年齢、場所、職業、性別をフェイスシートに入れたい。他に家族構成なども入れるか。

(渡邊委員) それぞれのコミセンが知ってもらうための努力をしているにもかかわらず知らないという人が何%いるかということは、大変興味がある。そうすれば、どうやって知らせたほうがいいかと考えて、全戸配布のうち世帯別があつたら、そこにも配ろうかとか、いろいろなことを考えればいい。だから、あまりそこまで詳しく調べても、得るところは少ないのではないか。やはり、知っているか、知らないかということが一番大事である。

先ほどの議論で、属性については、私も勤めているときは関心が薄かった。

(高田委員長) 全日型市民とパート型市民というようなことを聞いてみるか。

(井原委員) 問6のところ、取り組まなくてはならない課題として、ということで、いくつか挙げてもらうことになる。今あるそういった組織を使つてと、やってもらえたら

いいのではないか。

(高田委員長) 取り組まなければならない課題にどう取り組んでいるか、ということか。

(井原委員) 特に気になったのは、災害時の部分。災害時のボランティア組織のようなものが立ち上がっているところと、立ち上がっていないところがあるということを知ったので、地域によってはそういった組織があったほうが良いという答が出るかもしれないと思った。そういったことを聞いてもらえると、今後の話にもなるのではないか。

(高田委員長) 問8と問6をクロスさせることで何とかなるのではないか。問6でどういう課題があるか。それは問8のほうに行く。地域の中で、こういう課題があるので、その課題に対して、地域としてはどんなことをやっているのか。たとえば先ほどの防災。防災では自主組織があるのだと。その内容を聞くか。自主防災組織といったものが地域にあるのか、ということはどこかで聞いているのか。

(コンサルタント) 聞いていない。

(井原委員) 問10の助け合い活動の団体などに当てはまるか。

(高田委員長) この中に自主防災組織を入れるか。

(井原委員) コミュニティ協議会について、「コミセンの運営を誰がやっているか」ということではなく、コミュニティ協議会そのものを知っているか、ということを知問がなくともよいか。

(井波委員) このアンケートは、コミュニティに関するアンケートということになっているので、コミュニティとは、武蔵野市としてはこのような概念でとらえている、ということ、最初に書かないといけないのではないのか。

(高田委員長) (示さずに) 聞いたほうがよい。先ほどのところで、コミュニティのイメージとボランティアのイメージを聞こうという案が出てきたので事務局で工夫してほしい。

・続いて、問ごとの詳細な修正について、問1から検討した。

<問1>

(井波委員) 町の範囲までしかないが、「市」の範囲も入れる必要がある。

<問4>

(増田委員) 「信頼して」というところが気になる。信頼して、というと何か親密な感じがする。

(高田委員長) 信頼してはカットとする。肢の3は「1人か2人」、4「まったくいない」は、単に「いない」とし、5はカットする。

<問5>

(橘委員) 6の「安心できる」は不要。安心できると言ったら親子しかいない。

(高田委員長) 5「自分や自分の家族のことを知っている、気にかけてくれる」とあるが、2つの要素があるので、「知っている」を取って、「気にかけてくれる」とする。

<問6>

(清本委員) 「道路問題」も入れたほうがいい。

(事務局) 市への要望としては、「自転車対策」も多い。

(島森委員) 環境的なものは、緑地といったものか。

(事務局) 「緑・環境・景観」でどうか。

(高田委員長) 「まちづくり・土地利用」はどうか。

(清本委員) 「土地利用」と言われて、何を聞かれているか分からない。

(西村委員) 「まちづくり」をどう扱ったらいいか難しい。いろいろ、いくつかのものを混ぜたようなものがまちづくり。

(高田委員長) 言葉としては「まちづくり」か。土地利用は、消す。

(高田委員長) 地域として取り組まなければならない課題として、「健康づくり」「文化・教養活動」はどうか。

(橘委員) 課題ではない。

(西村委員) 曖昧だが。これに○を付ける人がいるかもしれない。

(小木委員) 広く拾い上げるという意味では、残しておいてもいいのではないか。

(高田委員長) 選択肢に、「ない」というのをつけ加えたらどうか。

<問8>

(高田委員長) 問8で意欲を聞き、問8-1として、「どのようなことなら、参加したり、貢献することができますか」とする。「貢献する」という言葉はどうか。

(西村委員) 上に1つ入るから、「参加」だけでもいい。

(橘委員) 項目は合わせてもらう。

(高田委員長) ではこれは、上と連動させる。

<問 9>

(井原委員) 増田委員にお伺いしたい。「小中学生が遊べる場所」となっているが、それとも「中高生が遊べる」の方がよいか。

(増田委員) 遊べると、居場所は少し違う。

(井波委員) 「集える」はどうか。

(高田委員長) 「小学生が遊べる場所」、「中高生が集える場所」としたらどうか。

<問 10>

(高田委員長) 「参加している団体はない」という項目は、最後に回す。

(西村委員) 6は市民社会福祉協議会か。

(井原委員) 市民社協だと広がってしまう。地域社協ではないか。

(高田委員長) 先ほどのところで井原委員が指摘した自主防災グループを入れる。

(清本委員) それから、NPOを入れてはどうか。

(井原委員) 「父母会」という項目をどこかに入れていただきたい。

(高田委員長) では、「PTA・父母会・青少年問題協議会」と。

(増田委員) 少年野球、少年サッカーなども。大人が関わるとすると指導であり、趣味や娯楽のサークルやグループとは違う。

(事務局) 「スポーツ団体」でどうか。

(事務局) あまり細かくなると、あれが入っていて、これが入っていないということになるので、「その他ボランティア・助け合い活動」の団体の中に包括すると考える。

(高田委員長) 具体的にはその他に書いてもらうということにする。

<問 10-2>

(高田委員長) 「1. 特に課題はない」を最後に置く。選択肢には、「人」、「金」、「場所」、「もの」があるが、「情報」も入れたほうがいい。NPOなどにアンケートをすると、行政にやってもらいたいこととして、PR活動をやってもらいたいということが一番出てくる。

(西村委員) 発信と受信と両方ある。

(高田委員長) 情報収集とPRというか。受信と発信。「情報収集と発信」でいいか。

<問 10-3>

(高田委員長) 「よく利用している」「あまり利用していない」ではなく、「2. 時々利用している」「3. 利用していない」とする。

<問 10-4>

(高田委員長) コミュニティセンターを利用していない理由で、「狭いため」が引っかかる。

(清本委員) 「遠いため」というものを入れてほしい。

(高田委員長) 「利便性」の中に含まれないか。他に、利用しない理由に「窓口の雰囲気が悪いため」というのを入れようと思ったのだがどうか。

<問 12>

(高田委員長) 「よく利用している」、2が「ほとんど利用していない」とあるが、真ん中に「時々利用している」を入れたらどうか。「ほとんど利用していない(数年以上使っていない)」とあるが、問 12-2 に頻度を聞いているので、「(数年以上)」はカットし、「利用したことがあるが、今はほとんど利用していない」としたほうがいい。利用頻度はどれぐらいかというところだが、「よく利用している」「時々利用している」というところを見れば、回答者の理由が分かるのではないか。

(西村委員) 関連するが、複数のコミセンを使う場合は、合計を回答するのか。

(高田委員長) 合計にしたほうがいい。

(事務局) 問 12-1 と 12-2 を入れ替えたらどうか。

(高田委員長) では、ここは入れ替えよう。

(高田委員長) 問 12 は「時々」を消して、「利用したことがある」だけで、それで1の人にそのまま利用頻度を聞けばいい。2は活かして、「利用したことがあるが、今はほとんど利用していない」、3「一度も利用したことがない」。

(清本委員) 問 12 の問いかけだが、「個人として利用したことがありますか」という聞き方は、よく分からない。

(高田委員長) コミセンを利用したことがあるかを聞いて、それから団体に利用したということ聞き、それから個人で利用したことがあるかということ聞くという順番になるのか。コミセンの頻度は、団体も個人も合わせて考えるのだろう。

(小木委員) 「どのような目的で」というところを、12のすぐ後ろに入れたら、聞いていることがよく分かるのではないか。

(事務局) 再度整理したい。

<問 13>

(増田委員) 「どのような取り組みをおこなえばより多くの方がコミュニティセンターを利用するようになると思いますか」とあるが、「みんなが」ではなく、「あなたが」どう

したら、ということ。

(コンサルタント) 「より多くの人」を「あなたが」に置き換わったらという観点から選択肢を見直したい。

<問 14>

(高田委員長) 市民ボランティアではなく、地域住民によるボランティアとする。また、その前に、「武蔵野市のコミュニティセンターは市の職員ではなく」ということを入れる。

#### ・八幡町コミュニティセンターの建替えについて

(高田委員長) 八幡町で主だったものは、学習室しかないのか。

(事務局) もちろん会議室はあるが、ロビーやピアノ、調理室、茶室などが無い。

(高田委員長) 建替えが必要だということか。

(事務局) 八幡町コミセンの建替えが必要かどうか、話し合っただけで欲しい。必要なら、今後の手順について話し合うということ。

(高田委員長) 別のところに建てるのか。

(事務局) 場所については、具体的にどうこうということではなく、慎重に地域の皆さんの意見を聞いて行うことになる。

(高田委員長) 今のところ、いろいろなコミュニティ活動をする時に、支障を来すほど小さいということか。

(事務局) 通常、普通のコミセンだと、ロビーがあって、誰でも入ってこられる。また、全部のコミセンではないが、障害者や高齢者向けに、エレベーターがある。また、面積でも、分館を除けば八幡町コミセンが一番小さい。加えて、地域住民の要望もあるので、その辺を勘案して、委員会として建替えをするべきなのか、今のままで我慢するべきなのか、別の方法を考えるのか、などを議論してもらい、答申を出していただきたい。

(小木委員) 将来についても、コミセンの重要事項については委員会を立ち上げて、その中で議論していくというスタンスだと考えていいのか。

(事務局) この市民会議の中で大きな方向性を出してもらい、実際には地域の中で、皆さんで話し合ってもらおう。今は、地域のコミュニティ協議会が中心となり、地域の皆さんの意見をまとめて、ある一定の方向性を地域で出してもらい、それを受けて、行政はそれに沿って建てる、直していくということ。入口は市民委員会で、大きな方向性を出してもらおうということ。

(渡邊委員) これにかなり関わっているので、発言しておきたい。この委員会として私が理解しているのは、コミュニティのあり方やこれからのコミュニティセンターのあり方について、抜本的に検討する、そういった中で議決された移転、新築のあり方について、どこにどんなコミセンを作るかということは、地域住民の意向を反映して、やっぴいこうということで、一昨年9月に地域組織として八幡町コミュニティセンター移転新築推進委員会が発足した。発足して1年経過し、中間のまとめを発表している。そういったことを受けて、この委員会で、コミュニティのあり方、コミュニティセンターのあり方を抜本的に検討する中で、すでに議会を通り、かなりの歳月にわたって市民運動や市長要請が続けられているので、その辺に対してコミュニティのあり方コミュニティセンターのあり方を大いに検討し、八幡町のコミセンが、それを介した内容、運営も含めてそういった問題についてここで決めていただくことが、地域住民の願いだと理解している。

(高田委員長) 八幡町コミセンの建設移転について、条件や必要事項を、この市民委員会で示す役割があるということか。こういう方向で作っていくべきだと。

(事務局) この委員会では大きな方向を示してもらおうということ。実際に新しく作る施設については、地域の皆さんで、コミュニティ協議会が中心となって、何をするためにどのぐらいの施設が必要だということを考えてもらうので、たとえば会議室の数などはここで考える必要はない。

(高田委員長) 方向性を出すにはもう少し議論が必要である。改めて資料に目を通して、次回、八幡町コミセンについて、きちんと話し合いたい。コミセンの資料については、八幡町だけの集計を出していただきたい。

(事務局) 八幡町コミセンだけで集計したものを用意する。

(橘委員) 今の建物は、一応活動しているからよいということではなく、コミセンと言えないようなお粗末なものであるということは事実なので、その点は皆さんによく理解していただき、コミュニティセンターとして恥ずかしくない、また今後コミセンとしてはこうあるべきだという1つのモデルケースになるようなものを作り上げていったらいいと思う。同じコミセンに関わる者として、そういった前提で検討いただきたい。

(高田委員長) 今日の資料をしっかりと見て、次回この話をして、われわれとして意思を確認したい。

では、第8回の委員会はこれで終了する。

〔了〕